

音楽研究会 部会記録

日時 平成30年1月10日(水) 15:30~16:45

部会名 音楽づくり 主任 吉田 百合子

参加数 13人 司会 菊地 美保 記録 西 久美子

研究部 研究テーマ：子どもの意識の流れを生かし、音楽能力の高まりを目指した授業のあり方

部会テーマ：一人ひとりの発想を生かし、思いや意図をもって音楽をつくる活動

○12月 授業研究会振り返り

<授業者考察>

(成果)

- ・「春の海」の鑑賞と関連付けることで、活動につながりが生まれ、子どもたちの意欲が高まった。
- ・「合いの手」に焦点を絞ったことで、各々の旋律を大切にしつつも、即興的な表現を加えることで音楽がより深まることの面白さを味わうことができた。
- ・グループを3人の少人数編成にしたことで、全員が意見を出し合い、関わり合いながら学習できた。

(課題)

- ・教師が導入で提示するモデル演奏は、子どもに見通しをもたせるだけではなく、「自分だったらもっとこうしたい。」という意欲や工夫を引き出せるよう、より簡潔なものにする必要があった。
- ・中間発表の場で取り上げた子どもの演奏で、導入時の教師のモデル演奏との違いが出てこなかった。また、より理解を深めるためには、一度聴くだけでなく、グループの工夫の説明を聴いた後にもう一度聴く機会を設けたい。
- ・約束事を先に多く提示してしまい、子どもたちが自分たちで気付いて学習に生かす機会がなかった。

<研究会についての協議>

- ・支援の必要な児童への手立てが丁寧で、全員が安心して活動できていた。一方で、発想の豊かな児童にとっては、あまり発展的な学習にはならなかった。
- ・約束事の数が多かった。絶対に捉えさせたいことは3~4つに絞って「約束事」とし、それ以外はヒントとして扱ってもよいのではないか。
- ・「合いの手」という言葉を使うなら、主な旋律が休符の時。休符の時間を盛り上げたりつなげたりする役割である。箏の子も、自分の旋律を2小節通してしっかり演奏したいのではないか。
- ・次の時間、最終的にはどのような音楽になったのか。
→旋律を重ねたり、終わり方を工夫したり、強弱や速度の表現をつけたりと、本時での学習を生かして変容があった。本時の終わりに示したモデル演奏を聴き、「もっとこうしたい。」という思いが生まれていた。

<担当理事 藤田先生より>

- ・今回の学習では、本時の後の第3時でどのような展開になるかが鍵であった。
- ・教師は、グループごとにそれぞれ違う支援を考えて指導することが大切である。
- ・合いの手を入れることが、「発想を広げる」ための1つの大きな引き出しになった。
- ・約束事とモデル演奏を大切にしている研究方法がよい。それを柱に、学校の環境や子どもの実態に応じて色々なやり方があることを示すことができ、提案として価値のあるものだった。

○まとめ (来年度の研究に向けて)

- ・モデル演奏の提示の仕方をしっかりと検討していく。
- ・約束事として提示するべきものと、確認程度でよいものを見極めを大切にする。
- ・今回のように、前に学習したことを生かし、学びの流れをもった活動は成果が大きかった。
- ・モデル演奏や約束事は、それまでの積み重ねをふまえ、シンプルに提示することが大切である。